

『スリー、ツー、ワンッ!!』
作…岩本憲嗣

■登場人物

小牧司郎 (28) マジシャンの卵
藤井宏 (8) 小学生
前田知則 (30) 司郎の先輩

○公園・噴水前

雲ひとつない青空。

多くの人で溢れかえる公園。

至る所でミュージシャンやパフォーマーがパフォーマンスを行い、それを人々が見物している。

小牧司郎(28) がステージ衣装を着てマジックを披露しているが観客は「人しかいない。」

藤井博(8) ただ「人小牧のマジックを見つめている。」

小牧「はい、それでは最後に皆さんの今日が幸せであるように平和の象徴を…」

小牧、白いハンカチを取り出す。

小牧「スリー、ツー、ワン、はいっ！」

小牧がハンカチをひるがえすと白い鳩が青空高く飛んでいく。

それを食い入るように見つめる藤井。

藤井、やる気なく拍手。

小牧「ありがとう。はあ、今日もお客さんは君だけだな。楽しかった？」

藤井、首を横に振る。

小牧「あ、そう。…マジック好きなの？」

藤井「別に」

小牧「じゃあ何で毎日？」

藤井「ねえ、そのハンカチ見せて」

小牧「え？これ？…どうぞ」

小牧、藤井にハンカチを手渡す。

藤井、小牧を真似て何度もハンカチをひるがえしてみる。

藤井「なんで鳩出てこないの？」

小牧「ひみつ」

藤井、やけになって無言のままハンカチを引っ張ってみる。

小牧「ああ！！やめろって！！」

小牧、藤井からハンカチを奪い取る。

小牧「ハンカチは関係ないの。お兄ちゃんじゃないとだせないの。分かる？」

藤井「じゃあさ、鳩以外も出せる？」

小牧「そりゃもちろん」

藤井「じゃあ犬だして」

小牧「犬？それは…」

藤井「嘘つき」

小牧「な、わかりました。お得意さんの頼みだから聞きましょう。ただ今は無理だからまた明日観においで」

藤井「わかった」

その場から走り去る藤井。

小牧「はあ、明日のお客様一名確保…か」

小牧、深く溜息をつき青空を見上げる。

○ 同・噴水前

曇った空に鳩が一羽飛んでいく。

藤井がやるきなく拍手する。
それに軽く頭をさげる小牧。

藤井「やっぱ鳩だけじゃん」

小牧「これからが君の為の特別ステージ。よくみてて、スリー、ツー、ワン、はい！」

小牧がハンカチをひるがえすと小牧の腕にチワワが抱かれている。

小牧「ほら犬だ」

不満気な表情の藤井。

藤井「そんなの犬じゃない。犬つてのはナポレオンみたいのを言うんだ」

藤井、小牧に一枚の写真を差し出す。

写真には大きなセントバーナード犬と今より若い藤井が写っている。

小牧「デカっ！君の犬？」

藤井「去年までは」

小牧「なにそれ？」

藤井「引越して来る時に飼えないからって叔母さんに預けたんだけど、逃げちゃった。きつと僕を探して迷子になってるんだ……」

写真をみつめて黙ってしまふ藤井。

小牧「そう……。でもほら、犬には帰巢本能つてのがあるからちよつと遠くても臭いを嗅いで帰ってくるんだって。俺の知り合いの動物マニアが言ってるから本当だって！」

藤井「僕の前の家北海道だよ」

小牧「え？…あ、そうなんだ」

藤井「だからお兄ちゃんそのハンカチでナポレオン出してよ。犬出せるって言ったろ」

小牧「え？あのね、いくらなんでもそれは……」

藤井「出せないの？なんで？死んでるから？」

小牧「それは…、ほらこんな小さなハンカチで出せると思う？無理でしょ」

藤井「じゃあ大きいハンカチ持って来たらいいんだね。わかった持つてくるからまた明日も来てね！」

藤井、走ってその場を去る。

小牧「ええ？…参ったな」

○前田家・居間

部屋中に水槽が置かれ、その中にはトカゲや蛇や鳥や昆虫が飼われている。

小牧がチワワを撫でながら座っている。

前田知則(30) が本を片手にやってくる。

前田の足元には数匹の小型犬がじゃれている。

小牧「先輩だったら飼ってる人知ってると思っただけだな」

前田、小牧の前に本を開いて出す。

そこにはセントバーナード犬の写真。

前田「あのな、こんなデカイ犬東京で飼ってる奴なんてそうそういないぞ。第一その子の犬じゃないと意味ないだろ」

小牧「同じに見えりゃ良くないですか？」

前田「飼い主には一目瞭然だよ」

小牧「困ったな。そうなると作戦変更だ」

前田「どうするんだよ？」

小牧「どうにか別の方法で納得させるんですよ。先輩も一緒に考えてくださいよ」

前田「あのな」

大型犬の鳴き声が聞こえる。

小牧「な、なんですか今の？」

前田「何に聞こえる？」

小牧「何って、犬の鳴き声ですよね？先輩大型犬飼ってるんじゃないですか」

前田「不正解。おいで！キューちゃん！！」

前田が呼ぶと奥の部屋から九官鳥が飛んで来て前田の肩に止まる。

九官鳥、犬の鳴き声を出す。

前田「まったくどこ覚えて来たんだか」

小牧「本物の犬みたいですな」

前田「小さいセントバーナードだな」

小牧「そうだ、先輩、明日キューちゃん借りてもいいですか？」

前田「え？何でだよ」

小牧「俺の言い訳に協力してもらおうですよ」

○公園・噴水前

小牧がマジックの準備をしていると藤井が肩にシートをかけてやってくる。

藤井「もってきたよ、でっかいハンカチだ」

小牧「それシートか何かだよね？」

藤井「これだけ大きければ問題ないだろ？」

小牧「え、ああ、その、それを使う前にいつものでちよっとやってみようか」

藤井「小さいから無理なんじゃないの？」

小牧「やってみないと分からない」

小牧、ハンカチを取り出す。

小牧「スリー、ツー、ワン、はい！」

小牧がハンカチをひるがえすと九官鳥のキューちゃんが現れる。

藤井「なにそれ？鳥じゃんかよ！」

九官鳥が犬の鳴き声を出す。

小牧「は、はははゴメン、お兄ちゃんの腕じゃ声だけしか運べなかったんだきつと。でも声が聞こえたって事は生きて……」

藤井「何だよそれ？馬鹿にしてるの」

小牧「いや、そうじゃなくてね」

藤井「もういいよ！出来ないなら出来ないって最初から言えばいいじゃないかよ！」

藤井、シートを捨てて走り去る。

小牧「ちよっと……！」

小牧、追おうとすると九官鳥が逃げ出してしまふ。

小牧「ああ、そんな！」

逃げ出す九官鳥を走っておう小牧。

○同・並木道（夜）

九官鳥を抱えた小牧が歩いてくる。

小牧「こら、もう逃げ出したりするなよ」

小牧、前方に藤井がいるのをみつける。

藤井「あ」

小牧「どうしたの？こんな夜遅くまで？」

藤井「母さんにシーツ取って来いって…」

小牧「そう」

並んで歩き出す二人。

小牧「そのさ、ごめんね。お兄ちゃんやっぱり嘘つきだ」

藤井「お兄ちゃんじゃなきや出せるの？」

小牧「いや、なんて言うかそもそもマジックってのはね」

藤井「出せないんだったらいいよ」

小牧「…でもさ、犬の帰巢本能ってのは…」

藤井、目をそらして黙り込んでいる。

小牧も話しかけるのをやめる。

○同・噴水前（夜）

藤井の捨てたシーツがそのままになっている。

小牧「よかった。持ってきてなかったね」

小牧、シートを持ち上げると中からセントバーナード犬が現れる。
セントバーナードは藤井を見つけるなり吠えてジャレつく。

藤井「ナポレオン!!」

小牧「え?」

藤井「偉いな!よく帰って来たな!」

小牧「どうなってるわけ?」

小牧、シートを持ち上げてじっと見る。

セントバーナード犬、その臭いを嗅ぐ。

小牧「なに?そういうことなの?」

藤井「お兄ちゃん、凄じゃん」

小牧「凄じゃかな。そうか、そうだよな。俺マジシヤンだもの。凄じゃなくっちゃ」

藤井にジャレるセントバーナード犬。セントバーナード犬が吠えると、呼応するよ
うに九官鳥も同じ声で吠える。

【終】

※ご利用上の注意※

- ・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba127@hotmail.com) までメール一報頂きますようお願い致します。
- ・ 但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・ 連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・ 仲間で集まつての練習でのご利用。
- ・ Skype などを紹介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・ 連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますよ

うお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumbal227@hotmail.com (岩本)